

国語科教育法と学生の反応

—学習指導法の考察—

吉 野 晴 義

A Study on Reading Material for Primary School Japanese
Language : Students' Response

By Haruyoshi Yoshino

◎はじめに

平成3年から7年の間に、学生と学び合ってきた。

3年(83名) 4年(131名) 5年(159名) 6年(381名)

7年(149名) 8年(109名) 9年(63名) 合計千七十五名受講。

各県からの出身者、年令も18才から40才、男女混合、誠実な人柄、自宅からの通学・寮・下宿からこれらが私の心を支えてくれた。声が高いからと(自認)マイク使わずに90分の講義を続けた。きた。

「私は2児が小学校に通えるようになったので大学へ入学しました」

「自宅から大学迄四時間近くかかるのです」

「この大学でもう6年にもなるんです」

「吉野先生が園長時代M幼稚園生でしたよ」

「私は先生の作詞したY中学校の卒業生です」

「校長先生の時生徒でしたけど少しも変わりませんね」

このような学生の言葉に励まされ、日々の授業に熱が入ったように思われる。

資料(講義の)は手書きで毎時1〜3枚位配布できるように心がけてきた。学生のなまの声をできるだけ活かし、幼児・児童の心を大切にできるような意図のもと、国語教材の分析を試みた。

卒業生から

「先生が時析、教え子の文章・言葉・行動を話してくれたので眠けがとれてしまいました。」

「担任時代のことを忘れずに、時々、子どもの姿の大切さを話してくれたので、今の仕事に役立っています。」

「祖父母のえらさを話してくれたことジーンとききました。」

「笑顔・読みぶり・板書・多くの資料——時々浮かびます。」

時々このような便りに接する。年間13〜15回・30〜33回の授業回数であるが、学生の授業態度に接する度に、講義へのファイトがムラムラと高まるのが不思議である。

先日、結婚式に同席したM銀行に勤めているYさんにお会いした。

「一年前にお式をしたHさん、赤ちゃん生まれましたので、行ってきました。そのうち、ニュースお知らせするそうです。」

という、明るいお話に接することができた。

学生の将来をみつめながら、授業に取り組んでいる。幼児・児童と共に言葉を愛する人間づくりの道を。心の深さを折々に追究していく。

教材をどのように解釈していくのかを学生の反応を大事にしながら試みてみよう。言語を磨き合える生活を大切にしたい。

◎教材 大きなかぶ (一年 上 教育出版) 〓八ページ〓

ロシアの話 うちだりさこ やく

おじいさんが、かぶのたねを、まきました。

「あまい、あまい、かぶになれ。大きな、大きな、かぶになれ。」

あまそうな、げんきの いい、とてつもなく 大きな かぶができました。

おじいさんは、かぶをぬこうと しました。

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

ところが、かぶは ぬけません。

おじいさんは、おばあさんを、よんできました。

おばあさんが、おじいさんを ひっぱって、おじいさんが、かぶをひっぱって——。

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

それでも、かぶはぬけません。

おばあさんは、まごをよんで きました。

まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって——。

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

まだ、まだ、かぶは ぬけません。

まごは、犬を よんで きました。

犬が まごを ひっぱって まごが おばあさんを ひっぱって おばあさんが おじいさんを ひっぱって おじいさんが かぶを ひっぱって——。

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

まだ まだ、まだ まだ、ぬけません。

犬は、ねこを よんで きました。

ねこが 犬を ひっぱって、犬が まごを ひっぱって、まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって——。

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

それでも、かぶは ぬけません。

ねこは、ねずみを、よんで きました。

ねずみが ねこを ひっぱって、ねこが 犬を ひっぱって、犬は まごを ひっぱって、まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって——。

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

やっと、かぶは ぬけました。

さとうちゅうりょう 絵

◎一読後の学生の感想（9年10月16日 調）

一読後 次のような感想文が寄せられたので、列記してみよう。

・おじいさんの願い「あまい、あまいかぶになれ。大きな大きなかぶになれ」——がなかった。愛情たっぷり育てたからだ（T）

・「うんとこしょ どっこいしょ」と息を合わせたのでぬけた。大変なおもいをしていたがうれしかったと思う。（E）

・かぶが大きすぎるといふのと犬とねこが立って一緒にひっぱってるところがおもしろい（K）

・おじいさん おばあさん まご 犬 猫 ねずみの弱い小さな力が固まって強い力になるというところが私は好きだ（H）
・私自身が仲間入りしているように書かれている。子どものときに劇をやったことが心に残っている（K）

・一段落ずつ登場人物が増えるのがおもしろい。幼稚園生といっしょに「うんとこしょ どっこいしょ」と言ったら楽しい

（H）

・人間だけでなく犬や猫まで手伝っている様子がとても面白く感じた。言葉の繰り返しが多くあるので工夫して読まないとな全部同じように聞こえてしまう。私も一度でいいからひっぱりたい（N）

・このお話はテンポがよく違和感なく、この話に入っていけるところがすごいと思う（K）

・おじいさんの願いが、かぶに通じたのだと思う。本当はネ

コとネズミは仲が悪いけど3人と3びきが力を合わせたので

（R）

・かぶをぬくという動きのくり返しがとてもおもしろい。私が一年生の時勉強した内容をはっきりと覚えているから不思議だ（S）

10名の感想の一部であるが、文章の面白さを登場人物によって力説。「うんとこしょ どっこいしょ」のかけ声6回に焦点を向け、読むことへの興味を一段とねらっている。

感想の多くを分析することによって、発問の工夫、指導上の力点、朗読する時の留意点が容易に把握できよう。「私が文章の中に入ってしまう」というK学生の声に興味をひく。12年前の一年生になった気持ちを大事にしたいというS学生の心情は文章を自分のものになっている。

発展学習としての劇化の工夫も楽しいものとなるし、続き話を書くことによって作者になりきることもできよう。

◎「大きなかぶ」のつづき話

・大きなかぶを「ストン」とわってみると中から、かぶのよう
せいが出てきました。「ぬいてくれてありがとう。」と、よう
せいがいいました。びっくりして笑ってしまいました。(K)
・それから おばあさんは この大きなかぶをシチューにしま
した。かぶはあまく おいしかったので みんなでぜんぶた
べてしまいました。(Y)

・おじいさんは家から大きなナイフを持ってきて大きなかぶを
ザクザクと切りました。それをおばあさんが料理してみんな
で仲良く食べました。本当にほんとうにあまいかぶでした。

(M)

・村中の人たちを集めて、かぶパーティーをひらきました。

翌年にはなんとさらに大きなかぶができて村中でひっぱりま
したとさ。だいこん村がにわかにさかえてきました。(C)

・そのかぶを病気の人が食べると病気がなおりました。そして
おじいさんはお店をはじめ はんじょうし一生幸せに暮らし
ました(U)

・「わっしょい、わっしょい」家まではこびました。「今日は
かぶのごちそうだよ」おばあさんはそうって料理をつくり
始めました。たくさんのごちそうをみんなでおいしく食べま
した。(M)

・みんなは大よろこびでした。「これからかぶパーティーをし
よう」大きなかぶですから スープ・つけものがいっぱい

きました。おじいさんの願いどおり、あまいあまいかぶだっ
たそうです。みんなのお顔が まあるく かぶににできたそ
うです。(T)

続き話を書くことによって長文への意欲が一段と高まる。一年生
なりに次から次へと話が広がり「大きなかぶのつづき話」文集が出
来上がる日も近い。

読むことの楽しさが、書きつづることの意欲向上へと結びつき、
クラス全員の「つづき話文集」の実りを期待したのである。

◎学習指導法をめぐって

一年生入学3〜4ヶ月後に出合う長文「大きなかぶ」。子どもた
ちに読むことの楽しさを味わわせたい。朗読の工夫(一人読み グ
ループ読み 対話読み 範読…)をすることによって 内容の豊か
さ 文章のすじの展開 人物の動き等に迫りたい。

一字読みから ことばとしての読み、一文の読みの馴れ ことば
のやりとりに目を向けさせていこう。

話の展開が おじいさん・おばあさん、まご、犬・ねこ・ねずみ
の登場によって 動きを一層高めている。「あまい、あまいー大き
なかぶになれ」という願いが話の出發。「うんとこしょ、どっこい
しょ」という力づよさのくりかえし(6回)が展開をおもしろくし
ている。

読者の一年生(6才)も、指導者の担任も、文章の中にすいこま
れてしまう。そして、読むことの楽しさにひたる。

「先生、劇をしてみようよ」「つづき話をつくってみよう」「お父さ

んお母さんに読んであげたら、ほめられちゃった」という子どもの声が教室内に広がる。

話すことの自信、読みの広がり、書くことの楽しさが一段と高まってくる「大きなかぶ」の教材。20才の青年学生が〈感想を書き〉〈続き話を書き〉〈ことばの用法〉に迫っていく過程を大切にしたい。一年生国語指導法の表現、理解の究明に役立つこと大であるから。

◎教材 お母さんの紙ひな (三年 上 教育出版) 〈五頁〉

長崎源之助 作

ここをこうおって、うら返しにこうたたんで、はい、女^めびなのできあがり。

おばさんは、おり紙のおひな様が上手ね、って。そりゃあ、もう何百もおってるんだもの、上手にもなるわよ。

わたしが子どもだったころ、せんそうがあってね、てきの飛行機が毎日のようにとんできて、ばくだんを落としたの。わたしたちは、ぼうくうごうにもぐって、ふるえていたわ。だから、おひな祭りどころではなかったわ。だから、おひな祭りどころではなかったわ。だから、おひな祭りどころではなかったの。

それにね、おひな様は、くうしゅうから守るために、いなかにあずけちゃったのよ。そのかわり、わたしの家はやけてしまったけれど、おひな様だけは助かったというわけ。

ところがね、せんそうが終わると、食べ物がなくなって、ほとんどの日本人は、おなかをすかしていたの。

「何か食べたいよう。」

と言って、小さいわたしは、ないてばかりいた。

「こまった子ねえ。」

って、お母さんは、わたしをしかったが、ある日、どっさり白いごはんを食べさせてくれた。

いつも、おいしいものつるとか、まめかすみたいなものしか食べていなかったの、白いごはんがとてもおいしくておいしくて、わたしは、顔じゅうごはんつぶだらけにして、むちゅうで食べちゃった。

お母さんは、そんなわたしをさびしそうに見ながら、

「毎日、おなかいっぱい食べさせてあげたいわね。」

と、深いため息をついた。

ところが、三月になって、その時食べたお米は、おひな様ととりかえたのだと知った時の、わたしの悲しさといったらなかったわ。足をばたばたさせて、一日じゅう、なきどおしいちゃった。

その時、お母さんが作ってくれたのが、紙のおひな様なのよ。

「こんなのいやだ、ほんとのおひな様でなけりゃ。」

わたしは、体をゆすって、だだをこねた。

でも、お母さんは、だまって、紙のおひな様をおっていたわ。だいい様、三人官女。五人ばやし……。おりながら、お母さんはいないた。

声をかみころし、かたをふるわせ、それでも根気よく、おひな様を作りつづけていたっけ。

お父さんが、まだ、戦地からもどっていないだったので、お母さんは、小さいわたしをかかえて、どうしていいかわからず、とほうに

くれてしまったのね、きっと。

お母さんのなみだを見たら、わたしは、とっても悪いことをしたような気がして、よけい悲しくなっちゃったわ。

その後、三月になると、いつも、お母さんといっしょに、おひな様をおるようになったの。

毎日おっているうちに、どんなりっぱなおひな様より、わたしは、紙のおひな様がすきになったわ。だって、紙びなには、お母さんのようなやさしさがあるんだもの。

さあ、あなたたちも、おぼえてちょうだいね。ここをこうおって、うら返しにこうたんで、今度は中がわにこうおって……。

山中 冬児 絵

◎一読後の学生の感想（9年10月23日 調）

～感想文と教材とのかかわり～

- ・小学校3年のとき出合った話。長い文章と思っていたがたったの5ページ。私自身に語られているようだ。（H）

＜文体の特徴に関心が寄せられている、8才時代と20才の頃の2回出合えた喜び、そして文章そのものの価値にふれている＞

- ・お腹をすかせた娘、大切なおひな様どちらもつらい選択だったろう。変わらぬ大きな母の愛が紙びなに込められている。

（E）

＜何か食べたいようと泣く娘、食べさせてあげたいと願う母

のため息、母と娘の両者の心情に迫ろうとしている＞

- ・紙びなには折った人の気持ちに沢山つまっていて重みがある。とても優しい感じのする文章である（E）

＜だをこねる娘のそばでせつせと紙のおひな様を折りながら泣く母の姿に心が向いている。かたをふるわせ、根気よくおひな様を作り続けている母の仕事をじっくりと読ませていく方向づけがひそむ＞

- ・心がこもっているものがどんな高価なものよりもすばらしいということをこの物語は教えてくれる（S）

＜S学生は「私は 今 物に不自由していない」と自己をみつめながらこの文章に取り組もうとしている＞

- ・お母さんの子供への愛を感じた、文の書き方がおもしろい。

（M）

＜長崎源之助作者と文体に関心をもちながら、母親と娘とのようすを調べていきたいというM学生の心情が伺える＞

- ・育ち盛りのわが子に、ごはんをお腹いっぱい食べさせてやれなかったり、おひな様を飾ってやれない母親のつらさがとても伝わってくる。「わたし」の無邪気で素直な行動が、かえって母親を切なくさせていると思う（H）

＜一読とは思えない深い感想を記している。H学生の読書力が伺える。クラス授業には高度な反応を示す児童がいることを忘れてはならない。指名の際には、上・中・下位にマッチした問いかけ、認め合いの手法を心がけたいのである＞

る。〕

・私は、この話を初めて読んだ。母の娘に対する愛情というのは、すごいなと感じた。本物のおひな様は確かに女の子の私にも感動を与えてくれるが、手作り、しかも、母親の。これ以上に価値のある物はない。この子に母の思いが伝わり、きつと、この子も良い母親になれたと思う(E)

〈長文の感想である。この文章に初めて出合ったE学生。感激したことを一気に記したもの。物語全文からE学生の感じとったことを記し、読感文としては短文であるが心情をくみとれる〉

・私の家には祖母の買ってくれたおひな様がある。私は大すきである。この大すきなおひな様を子供が生まれたらあげたいと思う。今、家の押入れの中で3月の来るのを待っている。

(T)

〈文章を読み、わが家のおひな様がうかんだのだ。私と祖母の間柄が理解できる。お丈夫なのだろうか。女子学生の一端が浮かぶ。〉

・うるさいと言ってどなりつけたかったらうけど、そこをぐつとがまんしていたお母さんは強い。私は、そのような状況でお母さんのようにがまんできるかという「できない」と答える。(H)

〈読みとる作業が深まるにつれて、この読後感が変わってくるだろう。細部の文節から母と子の交流が事実として把握

できる。強く心にひびいたこと一点をH学生は訴えている。〉

・最後の……が読者によいんを残していると感じた(Y)

〈文章の終わりに目が向いている。授業の流れの中で……の部分語り合ってみよう。読者の想像の豊かさが理解され、読みとることの楽しさが身にしみてこよう〉

◎学習の深さに迫る。

これらの読後感を参考に 指導法の力点が具体的に掴めてくる。文章をどのように解釈していったらよいのか。どのことばが大事なのか。発問の吟味は・読み手の感心の度合いは・心情の動きは・重要な段落は——多くのこと、指導者に問いかけてくるような気がする。

「何か食べたいよう。」—— ないばかりいた。

「こまった子ねえ。」—— どっさり白いごはんを食べさせてくれた。

「毎日、おなかいっぱい食べさせてあげたいわね。」—— ため息をついた。

「こんなのいやだ、ほんとのおひな様でなけりゃ—— 体をゆすってだだをこねた。

これらの会話のやりとりとその時々の母子の心情に迫ることも忘れてはならない。心の高まりが行動と共にあるのだから。

せんそうという事柄については深く入る必要はない。大切なのは、子の動作・母のしぐさ・子と母との交流の過程を大切に読み深めて

いけばと思う。時代背景については軽くふれておきたいが。

母の立場（ぼうくうごうにもぐる・いなかにあずける・家はやけてしまった・食べ物がない・いものつる・まめかす・だまって紙をおる・根気よく・お父さんは家にいない……）を十分理解しないと、子どもの変化を読みとれないかもしれない。

文脈中の言葉については板書・カード・ノート等によって個々の学習者に定着させたい。（おりながら、お母さんはいない。声をかみころし、かたをふるわせ、それでも根気よく、おひな様を作りつづけていたつけ——。）

顔じゅうごはんつぶだらけ・足をばたばた・一日じゅうなきどおし・体をゆすってだだをこねた・とても悪いことをしたような・よけい悲しくなっちゃったわ——読み深めることによって、子ども心の変化のようすが理解されよう。一読後のメモには、感動の中心が記されることが多い。それらを丹念に調べていくことによって、読みとることの過程が具体的になってくる。

一年生と三年生の物語文を取り上げ、学生10名の反応分析を試みた。日々の講義では受講生全員の感想を印刷し、分析を試みながら、学生の声を大切に授業を進めている。

物語・童話・説明・科学論説・作文——多くの教材を手もとに置き、受講生全員が朗読を試みながら、メモをとり、国語学習の向上に役立つよう励んでいる。教育実習実施済みの学生や次年度に実習する学生混みの教室であるから、その配慮のもと、子どものつまづく面にもふれながら、言語感覚、想像力を磨き合えるよう配慮し

ている。

◎国語学習指導上の留意事項／子どもの学習室から／一／一例▽

(一)、絵を見て話す。

気づいたことを気がるに話させる。文・文章の内容と結びつくことが多い。話す子どもが多い教室は明るさが増す。すばらしい心の展開がみられ楽しさが向上する。雑談の多い子どもでありたい。

(二)、うなずき上手

耳のおくで聞きとる。じっくりと。話す人を見ながら、うなずきことだ。聞きとることは考えることにつながる。教師自らがうなずき上手になること。子ども間の聞きとる姿勢をじっくりと高めていこう。

(三)、話さない子・耳をすまさぬ子・ガヤガヤする子

これらが子どもの本当の姿である。幼児・一／二年生の教室はにぎやかでなければならぬ。その実態をふまえ、クラスの雰囲気やさおさしながら時間をかけて、聞き合いうなずき合える教室を築きたい。

(四)、群読のよさ

人数を工夫し、文節の分担を考慮にいれながら音読してみよう。言葉のどこを高く発音、どこを低く発音していくかを学習者同士で考える。2・4・6……10人と人数を変えてみることも効果的である。

(五)、言葉のリズム

七音・五音のリズム、切り方に留意してみると言語の感覚への関心が高まる。4年生以上の児童になれば自分の言葉をふりかえることができよう。詩・俳句・標語・短歌・ことわざ・園歌・校歌にふれながら。

(六)、会話文に関心

人々の会話が文、文章の中でどのような働きをしているかを時々考えてみたい。会話のみを取り上げて語り合ってみる。登場人物の行動が読みとれ心情の深さにふれることが多い。

(七)、音読の効果

一人読み(個人)のよさ、二人で……いろいろと試みたい。一つの文を声をそろえて読むことの中で発声も磨かれよう。参加意欲を増すうえに効果がある。まず指導者(教師)自身が折々に読んでやること重要。

(八)、書き綴る生活

メモふうでよい。手まめに書く習慣を続けたい。そして、その作品を紹介し認め励ましていくことだ。紙片にノートに。視写の試みもよい。①取材②構想③叙述④批正の過程が重要であるがこだわりの必要はない。心情・行動の過程が具体的でありたい。時折、綴って回覧すると親しみが湧くことが多い。

私の著書四冊(学級の創造・豊かな子の育成・子と親の目・春夏秋冬)の一部を印刷して学生に配布し、書くことの大切さを説いている。△一例▽吉野作詞

。Y中学校 校歌(昭和35年 Y校設立時 制定)

下志津原にそびえ立つ 若人集う学舎に 筑波おろしの試練に耐えて 知性豊かに励み合い 永久に磨かん 民主の道を これぞ四中わが母校

歴史もゆかし四街道 沃野ひらけるこの大地 富士のけだかき姿を仰ぎ 心情豊かに睦み合い 永久に高めん平和の道を これぞ四中 わが母校

。M幼稚園 園歌 (10周年記念作詞 昭和59年)

みんなえがおでようちえん おはようあいさつげんきよくみどりいっぱい向山 ぼくもわたしもなかよしだ

みんなやさしいようちえん うさちゃんもるくんこんにちは

しろいこぶしの向山 ぼくもわたしもつよいんだ

みんなあかるいようちえん せんせいともだちおにあそびふじさんみえる向山 ぼくもわたしものびるんだ

。17才 青年の日 (C市 戦後五十年記念誌 掲載)

私の青年時代の記録。原稿用紙10枚程度のもの。時代背景を考。

(九)、視写 聴写の工夫

よい文を視写させよう。言葉のひびき、行かえ、文としてのきまりのよさがわかる。自分の考えを深めるのに役立つ。段落の効果、言葉のくりかえし、表記上のきまりが身につく。

(十)、指導案(学校、幼稚園によって形式は異なる(平常は略案))

○年○組 国語科学習指導案

指導者 ○○○○

①、題材

②、題材について

。子どもの実態

。教材について

。指導のねがい

③、目標

④、指導計画 ○時扱い

⑤、本時の指導 ○時扱いの第○時

(1) 目標

(2) 展開

| 予想される活動 | 指導上の留意点 | 備考(資料・時配) |
|---------|---------|-----------|
| | | |

⑥、評価

◎実習で子どもの言語生活をみかくための指針

〈幼稚園・小学校〉

一、子どもたちの話 雑談をじっくりと聞くことにつとめよう

くうなずき上手な人になろう

二、話そうとしない子にも問いかけ、近よって、進んで話してみ

よう。

くほめながら 自信をじよじよに高め得る人にく

三、四週間 元気で せっせと励もう

く体調を整え 両親家族に よろしくたのもう

四、保育・学習、諸活動く自ら積極的にやってみよう

く失敗する度に身につくことが多いのだからく

五、自己の話しぶり 読み方 接し方について 子どもに聞いて

みよう。

く子どもは 正直先生の資格をもっているのだからく

六、よく遊び よく動く(働らく)人になろう

く体をはって 子どもとの生活を楽しむ人にく

七、顔がこころを表わす

く体をはって 子との生活を楽しむ人にく

八、指導案 保育案をねり 担任 先輩に学ぼう

くよく聞いて 学び 書くこと考えることの生活を磨くく

九、実習が あなたを大きく育てる

く童心という 子どもの宝が 心の中にく

十、幼児・児童(3才く12才)の言葉をとおして磨き合う日々

く言語の生活によって 人は大きく たくましく育つものく

◎子どもを育てる国語教室手びき

一、「話すこと」「書くこと」「読むこと」「聞くこと」に問題があ

るから 学習意欲は高まる。

二、教材を読んだら「このことばから こう思う」という言語そのものを具体的立場でみがいてみる。

三、〈楽しい学習室〉の中で 子どもたちの意欲は 更に向上する。

四、教師の行動（話すこと・読むこと・書くこと・聞くこと・ほめること・叱ること）その時 その場で 子ども心は高まっている。

五、〈子どもの記録〉は命であるから 心こめて読み 力ぞえをおしみなく。

六、〈発問の工夫〉〈資料の整備〉〈板書の工夫〉によって 個々の子どもは意欲を増す。

七、多くの子どもの活動を大切にし〈指名〉〈考える場の構成〉に力を入れる。

八、〈能率を高める〉ために 教師自身の言葉を工夫し 無駄をはぶく。

九、〈朗読のよさ〉〈読書の拡充〉〈辞書の利用〉に力を入れ豊かな子の育成に力を入れる。

十、〈静かに考える〉〈明るさに満ちた〉〈失敗を大切に〉〈ことばを愛し合う〉〈力をつけていく〉これらに情熱、感性を。

四才、五才の幼稚園生八十余名と暮らした十四年前。当時幼稚園生であったHさんは 現在短大生で 私の講義を受けている。

私の作詞園歌を声高らかに歌い合った仲間のHさんである。何時

も「吉野園長さん 頑張れ」と励してくれているようだ。二度の出会いである。（幼児・大学生と）

◎おわりに

国語の道を求め続けて49年。幼・小・中・高・短大・役所と夢中で歩いて来た。飽きないのは何であろうか。

〈言葉は深い。人を育てることのむずかしさ。幼児・児童・生徒・学生の伸びはすばらしい〉

の一語につきる。人の中で 言語は 磨かれ 感性は高まっている。

純心な児等と一日暮しぬこの楽しみは最上のもの

遅進児の指導に今日も手こずりて暮れなずみたる校門を出づ

うず高くありしノートを見終えて外の面の雨をしばし見て居り

通知票を手にした児等が次々と点がからいと受持に問う

児童等の去りし校庭に佇みて吾はらちもなき妄想に居り

そこばくの俸給なれど入歯修理費の足しにと母に手渡す

研究論文推敲終えし安らぎをもちて今宵を寝につかんとす

祖父の七回忌供養なるも日なたぼっこに余念なき祖母

卒業証書授与式に参列せし喜びを今日最大の楽しみとする

母親のかげにかくれつつ来し児も人にも言う一年生となる

白髪之父は今宵も床の上に孫を抱きて桃太郎を説く

教師の道を歩き始めた頃「日に一首」子どもの歌を詠んだことが
なつかしく思い出される。記すことによって考えが深まる。

『国語教育』についての小論も49年間 あれこれと書いてきた。

まず自らが言葉を大事に そして 文章をまとめてみなければ—
という想いは今でも持ち続けている。●仲よし学級の創造(S48・
4・23・P355) ●豊かな子どもの育成(S54・11・3・P129) ●お
となの目(S61・11・11・P116)

●春夏秋冬(S63・9・15・P230) 著書四冊が私の生活を支えてく
れた。

共に学び合ってきた千七十五名の短大生が、私の国語教育への助
言をしてくれているように思える。正直で前向きで明るい学生に支
えられながら言語の道を歩き続けよう。

(平成9年10月31日 記)